

## 「名前」を巡る攻防：トニ・モリスンの *Song of Solomon*(1977)について

尾崎俊介

(英米文化選修)

### A Prolonged Struggle for “Name”: A Study of Toni Morrison’s *Song of Solomon* (1977)

Shunsuke OZAKI

(Faculty of British and American Cultural Studies)

アメリカの黒人女性作家トニ・モリソン (Toni Morrison, 1931-) の3番目の長編である『ソロモンの歌』の冒頭に掲げられたエピグラム、すなわち「父たちは天駆け、子らはその名を知るであろう」という一文が象徴的に示しているように、この小説は「子ら」の一人である主人公が「父たち」から受け継いできた一族の「名前」の由来をたどるといって、自己のアイデンティティーの確立を成し遂げる物語であると言える。いわばよくある父親捜しの主題ではあるのだが、しかしその父親捜しが「名前」の由来の探求を通して行われるということは注目に値する。というのもモリソンはあるインタビューの中で、アメリカ黒人は奴隷としてアフリカから連れてこられた時に本来の名前を失い、それによって祖先との絆を断たれて「文化的孤児」になっただけでなく、白人から与えられた名前をも拒否したことにより二重の意味で名前を失っており、それゆえ彼らは何らかの形で自己を反映するような名前を自から選びとることになった、と述べているのだが、<sup>2</sup>この発言からも伺われるように、現在の自分の名前と祖先の名前の間にある他律的・自発的ギャップの存在が、アメリカ黒人の置かれている歴史的状況を忠実に反映していることをモリソンが強く認識しているのは明らかであり、そうした「アメリカ黒人の名前」と「アメリカ黒人の歴史」との間にある様々な関わり合いへのモリスンの関心が、この小説には明確に表れているからである。『ソロモンの歌』において、主人公による「名前の探求」が単なる父親捜しのレベルを越え、アメリカ黒人の歴史全体への探求に否応なく結び付いていくことになるのはこのためである。それではこの小説の中で主人公ミルクマン (Milkman) は、祖先の名前を捜すことによっていかなる歴史を見いだすのか。しかし読者はそこへ急ぐ前に、名前を巡る様々なモリスンの考察に耳を傾けなければならない。

\*

『ソロモンの歌』に限らず、モリスンの小説に出てくる登場人物の名前や地名には、しばしばあまりにも明白な象徴性が付与されることが指摘されているが、<sup>3</sup>この小説はモリスンの名前へのこだわりが集大成的に

表れた作品であり、そうした名前についての考察は主人公ミルクマンの家のある街(路)の名前の由来を記した小説の冒頭から早速現れる。

ミルクマンが住むこの通りは、正式名称から言えば「メインズ・アヴェニュー (Mains Avenue)」なのだが、周辺に住む黒人住民の間での通称は「ノット・ドクター・ストリート (Not Doctor Street)」となっていて、二重のネーミングがなされている。これは語り手の説明によれば、19世紀末、フォスター (Foster) という名の黒人の医師が、当時白人ばかりが住んでいたこの通りに開業した事がきっかけで、黒人達がこの通りを「ドクター・ストリート」と呼び始め、これを郵便局など白人の体制側が嫌って「この通りは『メインズ・アヴェニュー』であって『ドクター・ストリート』ではない」という告知を出し、今度はそれを逆手にとって黒人達がこの通りを「ノット・ドクター・ストリート」と呼ぶようになり、今ではむしろこの呼び名の方が普及したというのである。一見小説の本筋とは無関係な、ユーモラスなエピソードの一つではあるのだが、ここで注目すべきなのは、白人側、黒人側双方とも、ある街路に名前を付けることがその街路を支配することにつながると見なしており、また実際にそうなっているという点である。イーヴァ・レノックス・バーチはこの点を汲んで、名前を付ける権力は白人のものであり、黒人のアイデンティティーは正しく名付けられることを要求することから始まると述べているが、<sup>4</sup>この指摘の通り、小説の冒頭に長々と語られるこのエピソードは、名前を付けることが支配と被支配の関係を確立するということを象徴的に示唆している。すなわち、モリソン自身が言うように「名前を付けることは、力を持つこと」<sup>5</sup>であり、相手の名前を支配することは相手そのものを支配することにつながるということをこのエピソードは語っているのである。

このような「名付け」という行為の性質を踏まえた上で『ソロモンの歌』を見て行くと、ここには多様な支配・被支配の関係が「名付け」の問題と絡めて描かれていることが分かる。例えば「メイコン・デッド (Macon Dead)」という主人公の一族の名前の由来が

まさにその典型的な例である。[図1]に示したデッド家の家系図にあるように、この小説の主人公であるミルクマンの本名はメイコン・デッドであり、彼の父親も祖父も同じくメイコン・デッドという名前なのだが、今ここで問題にするのはミルクマンの祖父にあたるメイコン・デッドⅠ世の名前の由来である。後に明らかになるように、もともとジェイクという名の奴隷であった彼は、奴隷解放に伴い、役所で自由人としての登録をすることになるのだが、その際担当の白人の役人が酒に酔って書類を書き間違え、本来ならば姓・名を書き入れる欄に出身地と父親の有無を書き入れてしまったことで、「メイコン」「デッド」という名前にさせられてしまったというのである。文盲であったジェイクは、いわば自分の名前をしっかりと所有することができず、そのために白人の官吏に新たに名付けられてしまったことになる。先ほど述べた名付けと支配・被支配との関連で言えば、奴隷解放後も形を変えて残る白人と黒人の間の力関係が、ジェイクからメイコン・デッドへの改名という出来事の中にはっきりと表れているわけである。

しかもこの名前を巡る支配・被支配の関係は、メイコン・デッドⅠ世が故郷ヴァージニアを去って北部のペンシルヴェニア州ダンヴィルという町へ移住してからも尾を引く。そもそもボストンへ向かうつもりだったメイコンがダンヴィルに着いてしまったのも、文盲の彼が道標に記された都市の名前を読みそこなったためであるのだが、とにかくインディアンの妻とともにダンヴィルに乗り込んで来たメイコンはその地で果敢に働き、うっそうとした原生林を開墾して見事な果樹園を作り上げるまでに至る。しかし彼が文盲であることに付け込んだ白人の一族の策略によって、せっかく丹精込めた果樹園を彼らに明け渡す理不尽な契約書類にメイコンはわけも分らないまま「署名」してしまう。だまされたと思った彼は、自分の果樹園を腕づくで守ろうと銃を手に何日も見張りを続けるのだが、もとより両者の力関係は明白で、結局彼は白人達にこともなく射殺される。メイコンは持ち前の勤勉さにより果樹園を所有することはできたものの、白人からおびやかなりに与えられたメイコン・デッドという名前を所有することができなかったために、命まで失うことになったわけである。

こうした経緯を踏まえて見ると、自分の名前を所有できなかったために財産を奪われ、命まで奪われることになった父親の姿を直接目にした彼の息子、つまりメイコン・デッドⅡ世が、所有すること、とりわけ「名前」を所有することに夢中になったのも当然であろう。ダンヴィルを追われ、さらに北上してミシガン州のある町に住みついた彼は、やがて不動産を次々と所有して自分の「名義」にし、これらを売らずに賃貸することで収入を得、中産階級へと成り上がって行く。彼は

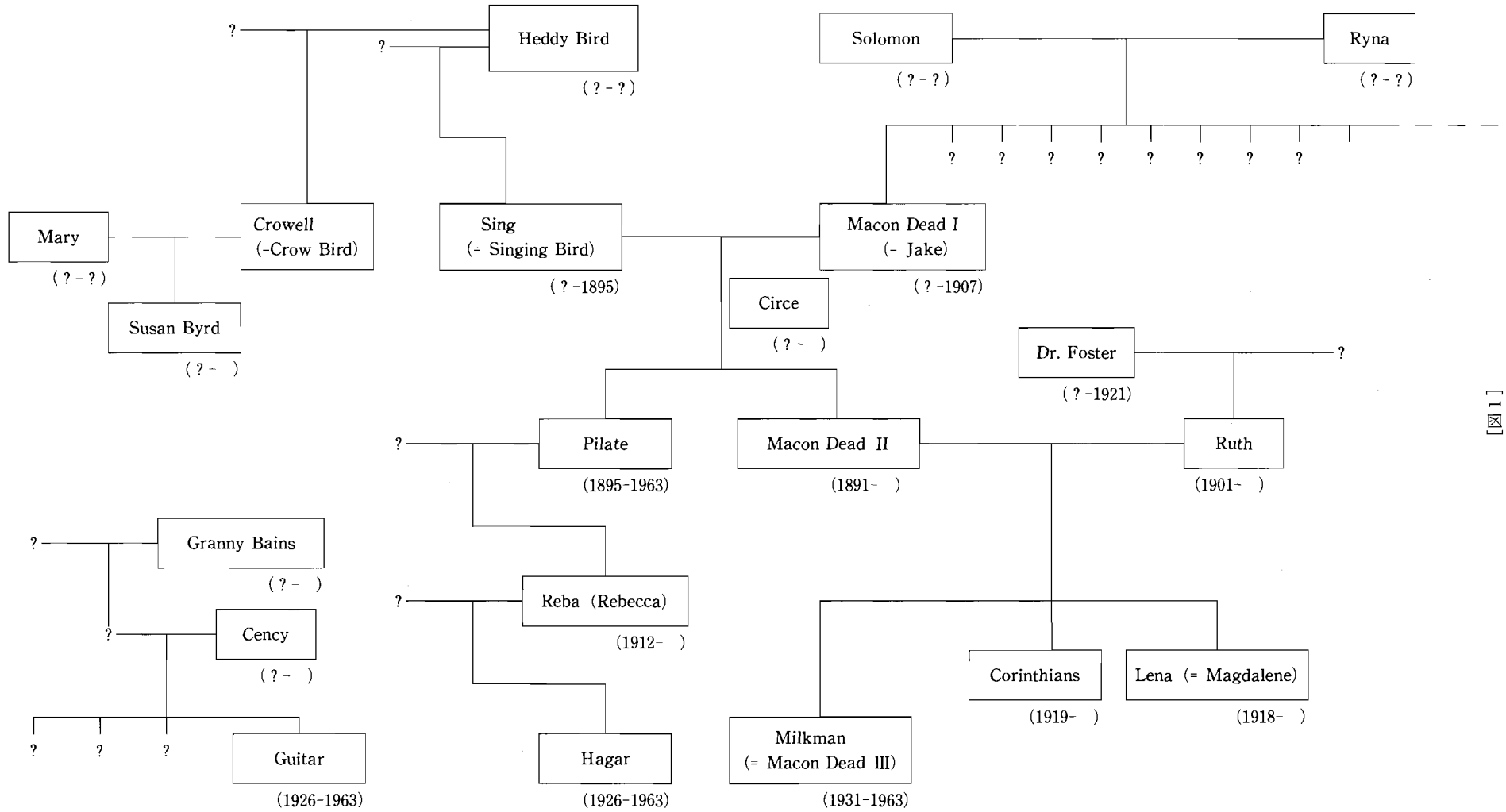
まず「ソニーの店」と呼ばれた店を買い取って、その入口にペンキで「オフィス」と大書し、いわば自分のものとして名前を付け替えて事務所とすると、次には当時その界隈でただ一人の黒人の名士であったフォスター医師、例の「ノット・ドクター・ストリート」の主であるフォスター医師の娘・ルース (Ruth) に求愛してこれを妻にし、二人の娘、コリンシアンズ (Corinthians) とリーナ (Lena)、そしてメイコン・デッドⅢ世・通称ミルクマンをもうけ、さらに当時の黒人としては珍しく自家用車をも所有して、裕福な暮らしを始めることとなる。

しかし一見何の不自由もない、恵まれた家庭に見えるこのデッド家の暮らしも、家族をつなぐ絆が愛情ではなく所有欲で成り立っているだけに、その内実は寒々としたものであることは容易に推測されよう。例えば幸福な家庭を絵に描いたような日曜日毎の家族揃ってのドライブも、実はメイコンの所有欲を満足させるため、つまり自分の財産を周りに見せびらかすためだけに行われる一種の儀式に過ぎないことがテキストによって暴露されていく。メイコンにとって名士の娘であった妻も、大学へ行ってフランス留学をしたこともある娘も、跡取りの息子も、自家用車と同じく自慢すべき所有物に過ぎないのである。

それではメイコン一人は満足であったかという点、必ずしもそうではなかった。デニス・ハインジーが指摘するように、メイコンの愛情は自分の所有物にしか向けられないのだが、<sup>6</sup>フォスター医師から譲り受け、自分の所有物にしたつもりであった妻ルースが、実はそうではなかったということを知った時、彼にとっても家庭は崩壊する。黒人の医師として名士であったフォスターは、その娘であるルースにとってあまりにも偉大な存在であり、ルース自身の言葉を借りれば「私が生きているか死んでいるか、本当に気に懸けてくれる唯一の人(124)」であって、それゆえ彼女は自己のアイデンティティーを「メイコン・デッドの妻」としてではなく、依然として「フォスターの娘」として保っていたのである。この半ば近親相姦的な父と娘の関係は、フォスター医師が死んだ時、その死んだ父親のベッドに半裸で横たわって身を寄せていたルースの姿を目撃したメイコンにもはっきりと認識される。ちょうど彼の不動産事務所のことを、町の誰もが相変わらず元の所有者の名前から「ソニーの店」と呼んでいたように、妻から「フォスター」という名前を奪い、「デッド」という名前に付け替えて、彼女を支配し得たと思込んでいたメイコンは、手痛いしっぺ返しを受けたわけである。

\*

支配と被支配の関係が「名付け」を巡って展開されるというこの構図は三代目のメイコン・デッド、すなわちミルクマンをも巻き込むことになる。先に述べた



[ 1 ]

事情から、ミルクマンが父母の間の不和の犠牲とならざるを得なかったのは容易に予想される事であるが、ここで注目すべきなのは、この不和がやはり名付けの問題として顕現化してくることであろう。ミルクマンの父親・メイコン・デッドII世としては、妻ルースを支配しそなったこともあり、望みをミルクマンに託すようになるのは当然で、「今ここでおまえがいずれ知らなければならぬただ一つの大事なことを教えてやろう。物を所有することだ。そしておまえが所有している物に他の物を所有させるのだ。そうすれば自分自身を所有し、また他人をも所有することになる(55)」という言葉通り、彼は自分と同じ名前を息子に与えることによってデッド一族の血の中に流れる所有への情熱を息子が持つことを期待し、また実際に自分の跡を継がせるために不動産の仕事をミルクマンに仕込むようになる。

一方ミルクマンの母親であるルースの方も、父親の死後、夫が彼女の事をかまわなくなってから、家の中のもう一人の男性であるミルクマンを自分の元に引き付けようとする。ミルクマンの16歳の誕生日に、ルースは「MD」、すなわちミルクマン・デッドのイニシャルの入ったブラシを彼に贈るのだが、このイニシャル「MD」は「医学博士(Doctor of Medicine)」の略称でもあり、ルースは冗談に紛らわしながらも、彼に医者になってもらいたいという希望を伝える。ミルクマンは、死を意味するデッドなどという名前の医者に掛かりたがる患者もいないだろうと、これも冗談に紛らわせてお茶を濁そうとするのだが、ルースは彼女の旧姓であるフォスターの名を用いれば良いではないかと追い打ちをかける。要するにルースは息子を医者にすることによって、彼の中に自分の父親を蘇らせようとするのである。父親メイコンII世の跡を継いで三代目「メイコン・デッド」を名乗るか、それとも医者になって「メイコン・フォスター」と名乗るか。息子を支配下に置こうとする父母の争いは、実質的に名付け競争になっているのである。

しかも、それに加えて「ミルクマン」という呼び名そのものが、夫婦の不和の歴史が彼に与えた傷跡であったことが後に判明することになる。夫からかまわれなくなったルースが、授乳期をはるかに過ぎていたミルクマンに授乳することによって性的な欲求不満のはけ口とし、その現場を他人に目撃されて町中に噂が広まり、その結果メイコン・デッドIII世は「ミルクマン」の呼び名を付けられたのだが、本名の奪い合いだけではなく、ミルクマンという呼び名にまで父親と母親の不和の歴史を背負わされていると知ったミルクマンに、精神的な危機が訪れるのも無理からぬことであろう。テキストの中の表現を用いるならば、「自分が他の人間の行動や憎しみを受け入れる、ごみ箱でもあるような気がした(132)」とあるように、「ミルクマン」

という呼び名を持つゆえに父母のいさかいの歴史を背負わされ、「メイコン・デッド」という名前を受け継ぐゆえに、歴代のメイコン・デッドと同様、所有することに情熱を燃やさなければならない、そういった自分の立場に彼はうんざりしていたわけである。

そしてこのうんざりしているという状態、これがこの小説の前半部におけるミルクマンの受動的な行動・役回りを説明している。彼は自分でも「この世について知っていることは全て、他人から聞かされたことばかりであった。自分自身では何一つしなかった(132)」と言っているのだが、確かに彼はこの小説の主人公であるにも関わらず、小説の前半では行動の主体となることはなく、むしろ他人から押し付けられたことしかやらないような曖昧な存在でしかない。成人したミルクマンは一応父親の跡を継ぐべく不動産の仕事を始めはするが、父親のメイコンと違って所有することへの飽く無き欲望がないために、この仕事もとりわけ関心の持てるものではない。しかもそんなふうでありながら、裕福な中産階級としての恩恵を拒むほどの哲学もない彼は、自分の一族の裕福さの陰でどれほど多くの同胞が苦しんでいるかということにはまるで無自覚なまま、黒人上流階級の人々の間で催されるパーティーに浮かれ騒ぐ日々を過ごしているわけである。またこうした主体性の欠如は、彼の恋愛に関しても表れている。ミルクマンは父方の従姉妹の娘にあたる5つ年上のヘイガー(Hagar)と17才の時からつきあっているのだが、所有すること自体になんら喜びを見いだせない彼は、一旦自分のものになってしまった彼女にそれ以上の興味も愛情も抱けず、だらだらと14年間もつきあった挙げ句、手紙一本で彼女を捨て、それでいて何ら良心の呵責を受けることもない。このように他人から名前を押し付けられ、それによって役割までも押し付けられているミルクマンが、その主体性を発揮し、この小説の真の主人公となるには、彼は自分で自分を支配することが必要であり、そのためには自分の名前を自分で所有しなければならないのである。

\*

では自分で自分の名前を所有するにはどうすれば良いのか。その一つの方法が、この小説の主要な登場人物の一人であるミルクマンの親友、ギター(Guitar)の取った方法であろう。ギターは子供の頃、製材所で働いていた父親を事故で失い、しかも製材所側がお情けで支払ったわずか40ドルの見舞い金を、さもありがたそうに受け取った時の彼の母親の卑屈な態度を目撃したことなどから、白人に対する激しい憎悪の念を抱きつつ成長する。そして成人したギターは、やがて過激な黒人組織「セブン・デイズ(the Seven Days)」の一員となり、白人が黒人を一人リンチする度にその報復として無作為に選び出した白人を一人殺す、という仕事にたずさわるようになるのだが、その秘密組織

の中で彼は「サンデーマン (the Sunday man)」という名前を得る。これは白人による黒人殺害が仮に日曜日に行われた場合、サンデーマンである彼が報復を担当するという役割分担をも意味しているのだが、ここで明らかのように「黒人坊は他の全ての物を手に入れるのと同じやり方で自分の名前も手に入れるのだ(88)」と言ってのけるギターは、サンデーマンという名前を自からの意志で選ぶことによって、自分自身の支配者になったわけである。

このように自分で自分に名前を付けたギターは、少なくとも小説の前半部においてはミルクマンよりもはるかに地に足のついた行動を取っており、また怠惰な生活のうちに黒人一般大衆から遊離しているミルクマンに対して、彼は常に批判的な態度を取る。しかしミルクマンとしても、白人に殺された黒人と同数の白人を無作為に殺すことによって両者の勢力図の均衡を図ろうとするギターの、あまりにも戦闘的な主義には懐疑的にならざるを得ず、ギターに倣って自分自身の名付けを行うことはできない。とすれば、ミルクマンが自分自身の名前を支配するには、メイコン・デッドという一族の名前を無自覚に受け入れるのではなく、意志と自覚を持って襲名すること、すなわち名前を遡り、家族の歴史を遡って、自分の名前が持つ意味を自分で確かめること以外には他に手段がないことになる。そして自分の名前の真の意味を捜すために家族の歴史を遡り、南部へ旅をするミルクマンを描くこの小説の後半部において、ようやく彼は生き生きと活動を始める。いわば彼はこの時、真の意味でこの小説の主人公の地位につくのである。

\*

それにしてもミルクマンの呼び名の由来を説明した際にも述べた通り、家族の歴史を遡ることはミルクマンにとって始めから気の進む作業ではない。それを敢えて乗り越えさせ、彼を南部へと向かわせるには、もう一人の主要人物・パイロット (Pilate) の存在が必要となる。

パイロットはメイコンII世の妹、すなわちミルクマンの父方の叔母なのだが、彼女とミルクマンは単に叔母一甥という関係にあるばかりでなく、そもそもミルクマンの誕生そのものにパイロットは関与している。先に述べたようにメイコンII世とルースの関係は冷えきっていたのだが、このまま嫡男が生まれなければ「あたしたちの一族はこれで終わってしまう(125)」ことを危惧したパイロットは、若い頃に習い覚えた薬草の知識を応用してメイコンII世に媚薬を盛り、その結果としてミルクマンが生まれた、というのである。つまりある意味でパイロットはミルクマンのもう一人の母親とも呼べる存在なのだが、ここでパイロットがミルクマンの誕生に介入する直接の理由が、端的に言えばデッド一族の名前を後世に「保存」するためであった、

ということに注目しておかなければならない。パイロットのこの行動によく表われているように、兄のメイコンが父親から支配欲と連携するものとして名前への情熱を受け継いだとすれば、妹のパイロットの方は、むしろ名前を保存するという意味での所有欲を受け継いでいたのである。それは文盲であった彼女の父親メイコンI世が、聖書から適当な語列を指さすことによって選び出してくれた「パイロット」という名前を大切に、その名を記した紙切れを金属の箱に入れ、それをイヤリングにして耳にぶら下げているという彼女の特異な行動にも伺われる。彼女は自分の名前を文字通り保存して所有したわけである。難産のあまり絶命した母親の胎内から自力で這い出るという形で生まれたため、母親はもちろんのこと母親の名前すら知らずに育ち、さらに12才の時には父親まで失ったパイロットにとって、彼女に手の届く限りの過去を保存することは非常に重要な意味を持っていた。彼女が父親の亡霊から命じられた「人の軀を置き去りにしたまま、飛んで逃げてはいけない(148)」という言いつけを守って、そうとは知らずに父親の遺骨を緑色の袋に入れて生涯持ち歩いているのも、まさに過去を保存する媒体としての彼女の役割にふさわしいエピソードと言えよう。

ところでミルクマンの南部への旅は、このパイロットが持ち歩いている緑色の袋の中身が金塊だと思い込んだミルクマン、及びメイコンII世の誤解に端を発する。この起こりは半世紀以上も前、父親を殺されてダンヴィルの町を逃げ出したメイコンとパイロットの兄妹が、逃亡中に偶然ある白人を殺害してしまい、その白人の財産であろう金塊を手にするようになった出来事にある。この時、金塊を持ち去るか否かで二人が争っているうち、白人の団に出くわして二人別れ別れになって逃げることになり、そのどさくさに紛れてパイロットと金塊の行方を見失ったメイコンは、てっきりパイロットが金塊を独り占めにしてしまったと思い込んでしまう。そして半世紀もたった後、パイロットの家で重い物の入った緑色の袋を見たというミルクマンの話聞いて、その中身がその時の金塊だと勘違いしたメイコンは、その過去のいきさつを息子に語り、この話に触発されたミルクマンはパイロットからこの金塊を奪い、これを元手にして独立しようと企むことになる。ところが一度は緑色の袋をパイロットの元から奪っては見たものの、その中身が人骨であることを発見したミルクマンは、消えた金塊の行方を捜すために、南部へと旅立つことになるのである。

\*

ミルクマンを南部へと向かわせるこの消えた金塊のエピソードは、いささか取って付けたような不自然さがあり、必ずしも説得力があるわけではないが、とにかく『ソロモンの歌』第2部では、ペンシルヴェニア

州ダンヴィル、およびヴァージニア州シャリマーへと向かうミルクマンの金塊探求の旅が主題となる。そしてそれは彼の祖先が自由と可能性を求めて北部へ向かったのとちょうど逆のコースをたどることであり、必然的に彼の南部への旅は彼の家族の歴史をたどる旅へと変質していく。

実際、最初に訪れたダンヴィルの町でミルクマンは金塊を発見することができず、当初の目的は空振りに終わるのだが、その代わりに彼はこの町で実に意外なもの、すなわち自分の家族の「名前」を見いだすことになる。はじめに述べたようにダンヴィルは彼の祖父メイコン・デッド I 世が白人に名前を奪われ、それによって果樹園を奪われたところなのだが、それにも関わらず「メイコン・デッド」という名前はこの町で生き続け、語り継がれていた。しかもそれは所有欲の亡者としてではなく、荒れ果てていた10エーカーもの土地を見事な果樹園へと発展させた、英雄的な開拓者の名前として語り継がれていたのである。町の長老達から伝説のメイコン・デッドの息子、つまりメイコン II 世の現在の様子を熱心に尋ねられるうちに、彼らがメイコン一族の成功の中に自分達の夢を託していたことにミルクマンは気づく。メイコン I 世が白人に惨めに撃ち殺されることによって、一度はついでたかに見えた黒人のアメリカン・ドリームが、メイコン II 世によって再建されたことをダンヴィルの人々は信じたがっていたのである。かくて町の人々に乞われるまま、メイコン II 世がミシガン州で不動産業を営み、大成功を納めていると語るうちに、ミルクマンの心の中に自分の家族に対する誇りが芽生えるようになり、それと同時に彼は自分の中にも祖父や父と同じくデッド一族の血が流れていること、すなわち所有することへの飽く無き願望が存在することに初めて気づく。自分が金塊を欲するのは、家族の過去のしがらみから自己を解放し、自由を得る為ではなく、「それが金塊であるというただそれだけの理由(260)」であることに彼はこの時気づくことになる。

そして所有欲と自分自身の祖先に対する関心の双方に駆り立てられるように金塊の在処への手がかりを捜すうち、ミルクマンは彼の祖父の死後、メイコン II 世とパイロットをかくまったサーシー (Circe) という女性から、白人に名前を奪われる前のメイコン I 世の本名が「ジェイク (Jake)」であったこと、さらに彼の妻の名前が「シング (Sing)」であったことを聞き出す。父親も叔母も知らなかった祖父母の真の名前を発見し、家族の歴史の空白を埋めることに成功したミルクマンはますます自分の祖先への関心を強めていき、次にメイコン I 世の故郷・ヴァージニア州シャリマーの村を訪れ、そこでスーザン・バード (Susan Byrd) というインディアン女性から彼女の父クロウェル (Crowell) にシングという異父妹がいたこと、そのシ

ングが結婚した相手の名前がジェイクであったこと、シングの母親がヘディ (Heddy) という名前であったことを聞き出す。この段階でメイコン・デッド I 世の世代、そしてシングの母親の世代までの家系図は完成する。そうなる唯一不明なのはメイコン I 世の親が誰であるのかということであるが、これについてはシャリマーの村の子供達が歌う童謡という意外な方面から謎を解く鍵が与えられることになる。この村で子供達の歌う「ソロモンの歌」という童謡が、パイロットが時折口ずさんでいた「シュガーマンの歌」の歌詞とほとんど同じであること、そしてその「ソロモンの歌」の中でソロモンの21番目の息子として登場するのがジェイクという名前で、まさにミルクマンの祖父と同じ名前であることに気づいたミルクマンは、この歌が自分の曾祖父の事を歌っていることを直感する。童謡「ソロモンの歌」の中では、ソロモン (Solomon) という男が奴隷としての境遇に耐えられず、故郷アフリカに「飛んで」帰ったこと、その際末子のジェイクを除いた20人の子供達と妻のライナ (Ryna) を捨てて行ったこと、またそのジェイクも結局取り落としてしまい、それをヘディという名のインディアン女性が家に連れ帰ったことなどが歌われているのだが、これらを事実として受け入れるならば、既に [図1] に示したように、ミルクマンの家系図は、アフリカから奴隷として連れてこられたソロモンの代まで遡って全て完成することになるのである。

\*

このようにしてミルクマンは金塊探求の果てに、金塊ならぬ自分の家族の真の名前を獲得することになる。そしてこの鮮烈な体験は、地名や人名に対する新鮮な興味をミルクマンに植え付け、それまで彼にとって識別のための便宜でしかなかった「名前」というものが、恣意的な記号以上のものとして眼に映るようになる。

ミルクマンは今や道路標識を興味深く読み、それらの名前の下には何が在るのだろうかと考えた。・・・この国の地名にはどんなに多くの昔の人々の生活や、薄れゆく記憶が隠されていることだろう。・・・

ミルクマンは眼を閉じてシャリマーや、ロアノーク、ピーターズバーグ、ニューポートニューズ、ダンヴィルにいた黒人達、あるいはまた血液銀行やグリーン・ストリート、そして玉突き場や理髪店にいた黒人達のことには思いを馳せた。彼らの名前。願望や、体の動かし方、欠点、様々な出来事、過ち、弱さから付けられた名前のことを思った。それらの名前は様々なことを証言していた。(333)

「自分の名前を知ったら、あくまでその名前にしがみ

ついていなければならない(333)」という彼の新たな決意表明にも表れているように、南部への旅を契機として、ミルクマンは「名前」と「その名前を保持するもの」とは不可分であるという認識を得る。そしてこの時、彼は彼の一族が経てきた歴史を理解しうる地点に到達するのである。

ミルクマンの家族の歴史、それは確かに否定的に見れば白人世界の圧迫を受けたアメリカ黒人の歴史のほんの一例に過ぎない。まず近いところから言ってメイコンII世を見れば分かる通り、黒人でありながら白人のような生活を望むあまり、彼が経済的成功と引き換えに家庭の幸福を失っていることはミルクマンが熟知しているところである。また一世代遡ったメイコン・デッドI世の無惨な死も、既に述べたように彼が白人との力関係において敗れたためであり、何よりも末子ジェイクを連れてアフリカへ飛び帰り、アフリカの地に一族の名前を復活させようとしたソロモンの英雄的な飛翔（およびその失敗）そのものが、実状から言えば妻と21人の子供を見捨てた上での自殺と見ざるを得ない。

しかしまた同じ一族の歴史を、肯定的に見ればどうなるか。まず地名に自分の名前を残し、空を飛んでアフリカへ帰ったという希望に満ちた伝説を作り上げたソロモン。そして新生活に賭け、敢えてメイコン・デッドという名前を訂正せずに受け入れて、<sup>7</sup>北部で果樹園を作り上げたジェイク。そしてジェイクの所有することへの強い執着を受け継ぎ、不動産業で成功したメイコン・デッドII世。彼らは皆、ある意味では自から「名前」を捨て、過去を捨てて新たな生活を切り開いてきたとも言え、そうしたたかたか力強い一族の歴史をミルクマンが発見したこともまた同様に事実なのである。

受動的に「名前」を奪われ続けた歴史は、反面、新たな可能性を求めて主体的に古い「名前」を捨て続けた歴史であり、そしてそのように、白人を出し抜いてきた歴史は、裏を返せば白人の支配に屈し続けた歴史とも言える。ミルクマンが名前捜しの旅を経て獲得したものは、コインの表裏のように挫折と希望、屈辱と栄光とがその時々で色合いを変える、そんなアメリカ黒人の歴史の微妙な側面だったのである。

\*

この微妙に色合いを変える歴史の鎖の中に自からを位置づけ、共同体の歴史の中に捉えられた時、<sup>8</sup>ミルクマンは好むと好まざるとに関わらずアメリカ黒人としてのアイデンティティを確立したのだと言える。「パイロット」という名前にふさわしく、ソロモンの伝説を歌の形で保存することによってミルクマンの自己確立の水先案内役を勤めた叔母<sup>9</sup>に対して、これまで以上に深い愛情を抱くようになるのも、またそれまで敬して遠ざけていた感のある父親メイコン・デッドII

世のことを、デッド一族の正当な一員として理解することができるようになったのも、ミルクマンが自分自身をこの歴史の一部として意識し、父親と自分との同質性を強く意識した後にようやく可能であったわけである。ウィルフレッド・サミュエルズをはじめとし、ミルクマンの価値観が南部への旅を通じてメイコンII世的な金銭第一主義からパイロット的な人間愛の価値観へ移行したと見なす説は多いが、<sup>10</sup>そのような一方から一方への移行ということではなくて、むしろメイコンII世的なしたたかさ、強欲さをも含めたデッド一族の特質を、肯定的かつ意識的に受け入れたところにミルクマンの人間の成長を認めた方が妥当であろう。しかし、ミルクマンが「デッド」という名前を擱んで自分自身の支配者となり、真の意味で人生をスタートさせようとした時、彼はある不可解な理由からかつての親友・ギターに命を狙われることになってしまう。

ギターのミルクマンに対する殺意は、合理的に考えれば全く説明不可能なものである。彼がミルクマンを殺害しようとしてまで思い詰める直接の原因は、ミルクマンが彼を金塊探求の試みに誘い、金塊が発見された場合、彼にも取り分を渡すことを約束しておきながら、その約束を裏切って金塊を独り占めしようとしていると誤解したことなのであるが、それにしても、もともと存在の曖昧なこの金塊はミルクマンのものでなく、ましてやギターが（セブン・デイズの資金源として）何がしかの取り分を主張できる性質のものではない。またこの金塊を巡るトラブル以外にミルクマンとギターとの間に不和を生じさせるような要因を捜すとすれば、例えば元恋人・ヘイガーに対するミルクマンの冷酷な態度（この結果、ヘイガーは狂死することになる）への怒りが挙げられるが、仮にギターが「生涯に一度だけ女を愛したことがある(311)」というその相手の女がヘイガーであったと仮定する場合を除いて、そのことがミルクマンに対して殺意まで抱く理由になるとは考えられない。ギターのミルクマンへの批判及び憎悪は小説の進行と共に深まるように描かれているため、実際にはそれほど不自然な感じはしないのだが、「俺達は黒人を消したりはしない(162)」というセブン・デイズの原則を曲げてまでミルクマンの命を付け狙うギターの動機は、実はきわめて不鮮明なのである。

ところがさらに不鮮明なのは、命を狙われたミルクマンの側の反応である。南部への旅から帰った彼は、パイロットを伴って再びシャリマーに赴き、パイロットが生涯持ち歩いてきたジェイクの骨を、かつてソロモンがその場所からアフリカに飛び立ったとされる岩場に埋めて半世紀遅れの葬送の儀式を行うのだが、その儀式の直後、彼はギターに銃撃される。最初の弾丸はミルクマンからそれまでパイロットの命を奪うことになるのだが、彼女が絶命した後、奇妙なことにミルク

マンは逃走を図るわけでもなく、またパイロットの復讐を果たすというわけでもなく、突如として完全な自己放棄に陥り、「俺の命が欲しいのか？・・・それなら、くれてやる。(341)」と叫ぶと、ギターめがけてソロモンの岩場からまっすぐに飛び立ち、おそらくはミルクマン、ギターの両者とも断崖から転落(死)することを読者に予想させる形で小説は幕を閉じるのである。

この最後のエピソードにおけるギターの不可解な殺意、そしてミルクマンの突然の自己放棄を合理的に説明する定説は今のところ確立されていない。読者としては、ミルクマンが自己を発見した途端にあえなく死を迎えたということを読者にただ惜しむしかない。しかし一つ言えることは、仮にミルクマンがこのような形でテキストから消えなかった場合、その場合にもこの小説に説得力のある結末をつけるのが非常に難しかったであろうということである。「名前」に秘められた自分の一族の歴史を掘り起こし、自己のアイデンティティーの確立を果たしたミルクマンがそのまま生存を続けた場合、彼がどのような計画をもって以後の人生に臨んだかについて推測することは非常に難しい。父祖以来の所有欲を受け継いだものとして、強欲な父親を継いで不動産の仕事をするのか、あるいはメイコン二世の対極にあるパイロットのように、所有欲を拒否する代わりに社会的には生産性のないアウトローになるのか。加藤恒彦はモリスンがアメリカ黒人の生きるべき道として、ブルジョア的の所有欲かあるいは生産性のないヒューマニズムかの二者択一の選択肢しか提示していないことを批判しているが、<sup>11</sup>小説の結末部を見る限り、モリスンは結局その二つの選択肢のどちらかを選ぶことすら拒否し、ミルクマンの死をもって問題を止揚してしまった。この結末は読者を困惑させるのに十分なほど安易なものであるが、確かに小説全体を通じてデッド一族の歴史にアメリカ黒人の歴史を重ね合わせてきた以上、今度はミルクマンの将来像の中にアメリカ黒人全体の理想的な将来像を見ようとする読者が現れることは避けられない。そのような形でアメリカ黒人の将来を占うこと、これはモリスンとしてもさすがに手に余ることだったのであろう。

\*

結果的に見れば、問題を止揚したモリスンの判断は正しかったのかも知れない。アメリカ黒人の「名前」というものが、彼らの歴史、すなわち勝利と敗北の二つの側面を併せ持つ過去の歴史を刻み込んだ媒体であることを見抜いたミルクマンと、その媒体から将来の敗北の歴史の芽を摘んでいこうとするギターとの対決は、そもそも論点が微妙にすれ違っており、このどちらかに軍配を挙げることはあまり意味がない。また仮にどちらかに軍配を挙げた上でミルクマンの行く末を示唆するような結末をつけたとしても、おそらくはあまりに平凡なものとなったか、あるいはリアリティの

ないものとなったであろう。

それならばミルクマンを飛び立たせることで父祖ソロモンの行為を踏襲させ、それによって後に残されたもの(=読者)の感傷的な記憶の中に彼の「名」をとどめ、そして彼が死ななかったなら達成したであろう様々な可能性を読者の心に漠然と想起させることを選んだモリスンの判断は、むしろ賢明であったと言えよう。ミロのビーナスの失われた両腕は、それが失われているがゆえに逆に無限の美の可能性を表現しているわけだが、モリスンが『ソロモンの歌』の結末でミルクマンを合理的な理由付けもないまま突如テキストから消し去ったことは、言うなれば故意にビーナスの両腕を切り落とすことであった。それは稚拙な処理ではあるが、おそらく他のいかなる結末よりもこの『ソロモンの歌』という小説にはふさわしいものであつたと思われる。実際、ミルクマンの死という絶望的な状況が描かれているながらこの結末が読者に不思議な満足感を与えるのは、ミルクマンがそれまでの無気力な状態から目覚めて生き生きと生き始めたという事実が読者に伝わった直後に彼が姿を消すことで、逆にその生き生きとした魅力的なイメージだけが純粹に増幅されて読者の記憶に残るからであろう。この小説の基調音として繰り返し言及されるソロモンの飛翔は、既に述べた通り、客観的には明らかに現実に絶望した上での自殺であるにも関わらず、それが彼の「子ら」によって解釈し直され、伝説と化し、ついには現実の束縛からの解放の象徴となっていった。ちょうどそれと同じようにミルクマンの死もまた読者の心の中で解釈し直され、絶望的な事実とは全く別物の、ある種の達成感をもたらすものとなっているのである。絶望的な事実には希望的なものへと転換し得るし、逆に希望に満ちた状況の裏側にある種の絶望が隠されていることも有り得る——この絶望と希望とが複雑に転換し合う摩訶不思議なダイナミズムこそ、まさにモリスンが小説『ソロモンの歌』におけるアメリカ黒人の「名前」を巡る考察を通じて、我々読者に提示しようとしたものだったのである。

\* 本稿は中部英文学会第34回大会における口頭発表をもとに加筆・訂正を行なったものである。

#### 注

1 Toni Morrison, *Song of Solomon*, (New York: Knopf, 1977). なおテキストとしては Signet 版 (New York: New American Library, 1978) を使用し、引用箇所のページ数は括弧内に示す。

2 Thomas LeClair, "The Language Must Not Sweat" in *The New Republic*, (March 21, 1981), 28.

3 例えば Wendy Harding & Jacky Martin, *A World of Difference: An Inter-Cultural Study of Toni Morrison's Novels*, (Connecticut: Greenwood Press, 1994), 19. を参照せ



よ。ここでハーディングとマーティンは、モリスンが登場人物の性格付けを行うのに、しばしばネーミングという単純な方法を使うことを指摘している。

4 Eva Lennox Birch, *Black American Women's Writing: A Quilt of Many Colours*, (Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1994), 165.

5 Thomas LeClair, 28.

6 Denise Heinze, *The Dilemma of "Double-Consciousness": Toni Morrison's Novels*, (Athens: The University of Georgia Press, 1993), 83.

7 Barbara Christian, *Black Feminist Criticism*, (New York: Pergamon Press, 1985), 51. を参照せよ。ここでクリスチャンは、メイコン・デッドが白人に誤って付けられたこの名前を訂正しなかったのは、この名前がデッド家の挫折を表わすと同時に、逆説的にデッド家のヴァイタリティーの体現にもなっているためだと指摘している。

8 Toni Morrison, "Rootedness: The Ancestor as Foundation," in *Black Women Writers (1950-1980): A Critical Evaluation*, ed. Mari Evans, (New York: Anchor Press/Doubleday, 1984), 343. このしばしば引用されるエッセイの中でモリスンは、個人がその祖先との間に、ある種の連帯感を保持

することの重要性を主張している。

9 "Pilate" という名前が "Pilot" すなわち水先案内人としての役割を想起させることを指摘する論は枚挙に暇がない。例えば Peter Bruck, "Returning to One's Roots: The Motif of Searching and Flying in Toni Morrison's *Song of Solomon*", in *The Afro-American Novel Since 1960*, eds. Peter Bruck and Wolfgang Karrer, (Amsterdam: B.R.Gruner, 1982), 297. を参照せよ。

10 Wilfred D. Samuels & Clenora Hudson-Weems, *Toni Morrison*, (Boston: Twayne Publishers, 1990), 64. を参照せよ。ここでサミュエルズとハドソン＝ウィームズはスーザン・ブレイク (Susan L. Blake) の同様の説を支持しつつ、ここに述べた解釈を展開している。この他、上掲の Barbara Christian など、ミルクマンのパイロットとの同質性を強調し、父親のメイコン・デッド二世との同質性を過小評価する批評家は多い。(Barbara Christian, 55. 参照。)

11 加藤恒彦, 「*Song of Solomon* 論：黒人中産階級の自己疎外とその克服の道をもとめて」, 外国文学研究 (立命館大学外国語科連絡協議会) 64 (1985) 所収, 151頁を参照せよ。

(平成7年9月11日 受理)